

## 内山完造の雑記を読む

大里 浩 秋

はじめに

内山完造（以下、完造さん）は、1913年から47年まで、当初は大学目録の販売員として、途中からは日本書籍を扱う書店の経営者として、上海を根拠地にして中国各地で在留日本人のみか多くの中国人と交流し、帰国してからはその経験を生かして日中友好の活動に尽力したことで知られる。完造さんの甥の内山籬を含む私たち数人は、こうした完造さんの生き方に敬意を表しつつ、これまで語られてきた彼の足跡をさらに掘り下げて理解することを目指して、孫安石を責任者として内山完造研究会を結成、幸い本学の学内共同研究助成を得た。そして、この2年彼の自伝『花甲録』の読み合わせをして、そこに書かれた内容に沿って故郷岡山県井原市芳井町、丁稚奉公した大阪、京都の店の周辺、さらに上海に足を伸ばして彼が歩き回ったであろう先々を訪ねて想像をめぐらしたが、そうした作業に加えて取り組んできたのは、彼が中国滞在時に書き残した雑記を読み合わせることであった。

ところで、本誌の内山籬「内山完造の自筆文書について」が紹介しているように、完造さんが書いた上海在留時期に雑記を記したノートで今読むことができるのは4冊のみであるのは、とても残念なことである。しかし、公表する考えがないままに書いたこの時期（1944年6月から46年10月まで）の文が飛び飛びながら読めることで、日中戦争の大詰めに近い頃から敗戦後1年を経過した頃までの上海や東北地区（以下、満洲）における各種の状況やそれへの完造さんの想いを知ることになり、敗戦4年を経てからまとめた『花甲録』中の同時期についての記述と対比できることにもなって、帰国後どんな想いで日中友好に取り組んでいったのかを考える際の貴重な記録になっていると思われる。

以下は、研究会メンバーで読み合わせた雑記中の最初の部分、1944年6月5日から8月17日までの全文である（それに続く時期については、次号に載せる予定）。完造さんの字が個性的なために解読に苦戦したが、本学非文字資料研究センターで原稿校正の仕事に従事する岡享代さんに字のくせをつかんで解読文（案）をつくっていただいたおかげで、スムーズに読み合わせができた。それでも解読不能な字が残り、それは1字につき□1個を付した。また、字を訂正したり補った方がいいと思えるところにはその字を〔 〕内に加えた。さらに、もともと句読点のない文章に適宜それを加え、人名を除いては旧字体を新字体に改めたことをおことわりする。

## 内山完造 1944年6月5日から8月17日までの雑記

### 驚異的書物

上海は物価が高い高いと云ふ。私は江南双書の第一編として『上海汗語』を発行した。其定価が破天荒の洋八拾元であった。然し心配なく売れた。『生ける支那の姿』の四版も矢張り洋八拾元とした。此も心配なく売れて行く。現地版のレコードであったのだ。其後の出版は悉くこれにならうで『陶晶孫日本文集』百円で、『上海の文化』が百五十元、『上海に関する文献目録』が二百元、『支那建設論』六十元と云ふ調子である。処が此に破天荒の出版物が現はれた。それは徐家匯天文台の出版で東亜気候図である(全紙四ツ切版)。大本ではあるが百七十五頁で定価実に洋壹万円である。此れは恐らく世界的驚異であらうと思ふ。「三百冊限定」である。(二六〇四, 六, 五,)

### 米英軍の大陸上陸

問題になって居った米英軍の欧州上陸が、六月六日(一九四四年)に北仏セーヌ河口ルアーヴル港からノルマンデーの間に於いて上陸を開始した。一方カレーとダンケル〔ク〕に向ふては大爆撃が行はれた。上陸兵力は五十ヶ師との事である。上陸軍の司令はアイゼンハワーで直接の指揮はモントゴメリーであるとの事だ。此れは即ち欧州第二戦線である。空輸部隊だけでも其勢力は四ヶ師であると云ふ。一方伊太利戦線に於いても独乙は遂にローマを撤退したとの事である。独ソ戦線は一寸一服の形らしい。但し新聞丈けかも知らん。(二六〇四, 六, 六,)(一九四四年, 昭和十九年)

### 確信を失ふことだ

今日の人心を考へて見るに、最も憂ふべきことは各人が確信と云ふことを失ふてゐるのではないかと云ふことが私には感じられる。明治の維新はドウして出来たかと云ふと一口に確信に立脚して行動したからだと言はれて居る。無論確信だけで成功するものではないが、ソウ言はれる程みんなが確く信じて居ったのである。「必勝の信念」と云ふことは何にか必ず勝つと云ふことを心の中に決定して居ることである。ドンナ事があつても負けない、勝つと云ふことを決定して居ることである。日清戦争には陸海軍は云ふ迄もなく国民が此信念を持って居ったのである。日露戦争にも此確信があつたのである。ソシテ今日人心に其確信について疑ひがあつたりそれを失ふて居る様な事があつたら、由々敷一大事であると私は思ふ。然し其確信と云ふことは実はタダ一寸話を聞いたり文章を読んで出来るものではない。

重松先生と云ふ鍼灸の先生の話に私が確信を得たのは、初めて九州地方へ旅稼ぎに出た時に或る炭坑町で一人の患者を診察した、其人は左の腕に沢山の膏葉を貼って居た、然し自分が診察して見ると病氣は右の腕にある、其処で左の腕が病むかと聞いて見た処ソウだと答へられたので、ソレでは私の診察とは違ふ、私は右の腕に病氣がある左の腕は何んとも無いから此治療は私には出来ませんと謝絶した、処が其患者はソウですホントは右の腕ですドウカお願いしますと云ふ事で私も治療したが、其時に私は確信を得た、自らの勉強はソレ迄確信が乏しかった処が此患者に出くわして始めて私の確信が出来たと云ふ事を話された。

私はソウ思ふ。如何なることでも知恵だけではダメだ。其知恵が実際の事柄にブツッかって知恵によって間違ひのなかつた時に初めて確信と云ふことが出来るのだ。私の支那観が一つの信念に聴へるのは悉くが私が経験に立って居るが為である。タダ人の話や人の文章を読んで云々してるのは知恵の事

だ。確信は知慧が経験の坩堝を通して出来るものである。今日私が人心に憂ふるものは此確信を失ふて居る様に思はれることである。信は人言である、信は古字の仰である。(了)

### 実力の否定

私は今日の行方<sup>ウチノコト</sup>に一つの矛盾がある様に思ふ。それは実力の否定と云ふことである。実力とは何事か、それは実際の力と云ふことであると思ふ。仮へば私の力は三貫目の物を半町持って行くことが出来ると云ふことではなくて、私は三貫目の物を半町持って行って後に云はれる私は三貫目の物を半町持って行くことと云ふことが、即ち私の実際の力である、実力であるのだ。此機械は一日五十噸の水を汲み上げると云ふことではなくて、此機械は現在毎日五十噸づつ水を汲み上げて居ると云ふことである。それが実力である、つまり実力は経験の後に云へる言葉である。旧経済は此意味からいへば一つの実力であったのだ。然るに新経済はドウであったかと云ふと。此れは実力ではなくて理想力であったのである。理想力が実力を追ひ払ったのである。処が実際に入用なのは何んであったかと云ふと、云ふ迄もない実力であったのだ。であるのに其実力を追ひのけて、未だ知慧であつて実力となつて居らん処の理想力が実力を出そうとしたのである処が間違ひであつたのである。

理想は知慧である。実力は知慧ではない。青い鳥は何れも向ふの方の樹の枝に、林の中に居るのである。採〔捕〕へて見ると青い鳥は又向ふの森に居るのである。此傾向は実力の否定と云ふことであると私は思ふ。(了)(二六〇四、六、七)

### 二つの力 友松田諦氏講演

全と個、一と多、心と物、求心力と遠心力の四つの組合せが今日決戦下の決勝の頂点にある様である。

吾々は純粹を求める心が強い。それは今日の特長である。其処には非常な排他的のものがある。然しそれだけでダメである。吾々は八紘為〔一〕字とか大東亜共栄圏の確立と云ふことを目指して居る。此事業は排他的では出来ない。純粹を求めては不可能である。ドウしても抱擁的でなければならぬ。それは遠心力である。今日の特長としては全と云ふ事が非常に強い。その為めに個性と云ふものを忘れ勝ちである。何んでも一色にせしとする。それも戦争の特性である。然し各々の多を抱擁するにあらざれば真の一には歸し得ないのである。心を第一とする吾国の特色が今日では忘れられて、ヤ、もすれば物第一第二に傾いて居る。此れはホントの力の集中ではない。全の中に個を、一の中に多を、心の中に物を、求心力と共に遠心力を如何にして發展せしめるか、其処に勝敗の決がかゝって居る。(了)(二六〇四、六、七)

### 紙幣の不足に就いて

最近上海の中央儲備券が逼迫して来たとの事である。それは矢張り出来ないからだとの事である。ナゼあれだけ市場にあふれて居る筈の紙幣がそんな事になったのか。物価が上るにつれて紙幣が其額面金額を大きくして行くのがインフレの事態であるのに、此処では百元札迄で喰ひ止め様として居る事が最大の原因らしい。額面を大きくしない限り一方の物価が上るだけお札の数を多く渡さねばならぬ事になるので、其処に不足が来たのである。此まゝで発行を喰ひ止め得るかドウカである。万一百元札迄で発行を止め又それ迄の札も此れ以上出さないとすれば、必ず紙幣が上つて来るであらうがそれが出来るかドウカ、仮へ五百元札は出さん迄も百元迄のお札にしても尚ほドンドン出るならば、お札の高くなる事は万々ないと思ふ。

今日の紙幣の逼迫は、一面から云ふと軍と大東亜省とが分袂した事も一つの原因であると思ふ。其処には軍の必要は軍自らが此れを自らの方法によって行ふと云ふ事になった。此方面のお札の入用がドウなつて居るか知らんが、恐らくは非常に多額の入用があつた事と思ふ。兎に角此現象によって市場に如

何なる現象が見へるか注意を要するものと思ふ。(二六〇四, 六, 八,)(昭和十九年)

### 心と物

今度の大東亜戦争に於いて吾々は、戦争は必ずしも心だけで出来るものでもなく、又た武器ばかりで出来るものでもないと思ふ。由来吾々は意気と云ふ事に非常な力を認めて来て居た。私は日本人は余りにも物を軽視して居ると考へて来たのであるが、それにも不拘日本が戦争に勝つのはタダ大和魂で勝ったのだと信じて居たらしい。処が仮へそれは戦争の一部分に過ぎないにしても、北に於いてはアッツ島に於いて南に於いてはガダルカナル島に於いて悲壮なる玉砕を見たのである。北のアッツ島でも南のガダルカナルでも玉砕せる部隊に大和魂は溢れるばかりであった事は云ふ迄もない事であるが、イヤそれがあるから玉砕するのであるが、それにも不拘二島の結果を勝敗と云ふ二つの見方のみから見れば、何れも初めには完全に彼等が負けて吾等が勝利して佔領したのであるが、后には不幸にして米軍が勝って吾が軍が玉砕したのである(敗れた姿である)。そして其原因は、大本営も発表せる通り敵のボウ大なる兵力とバク大なる武器の数とが遂に此の悲壮を生ぜしめたのであると云ふことである。以来一隻の船一機の飛行機と云ふことが叫ばれる様になり、明年春になれば飛行機の数にはまさるに敵を超へるであらうとか伯仲するであらうとか云ふ様な言葉が新聞の上にも見へる様になった。私の友人の某部隊隊長は宜昌から南方へ転戦の途中私に話して呉れた。今度の戦ひで其数量と其強さと云ふもの、力をハッキリと知ることが出来た、よい勉強をしたと云ふて居た。

私は此して日本が今日迄反骨心が勝利の決定をすると云ふ唯心勝利側に偏して居た事と知ったが、同時に今度の戦争によって米英もキット唯物勝利側に偏して居た事を自ら知ったであらうと思ふ。何れにしても偏して居たと考へられる。正しくは心と物との水平力が勝利の決定権を持って居るものであると言ふ事を認めさせられたことは間違ひない。(二六〇四, 六, 八,)

### 有ったものが無くなったのだ

吾々だけではない、人間はケン忘性である。特に自らの為めに都合の悪い事はドンドン忘れて終ふものである。それでもよいのだ、それだからこそ生きて居られるのである、あったこと悉くが記憶されてでも居たら人間は狂気になるであらうと私は思ふ。そこで人間のケン忘性こそは神様の傑作であると私は云ふのである。

私共は五六年前の事を考へて見るがよい。八月十五夜の中秋になると、杭州湾の大潮と云ふ世界に二つよりないと云ふ潮の逆流の壮観の為めに看潮列車を出して多くの日本人が見物に出かけたものである。其頃支那人は何分にも敵人であると云ふて特種扱ひされて居た為めに先づ普通の人々では看潮になど行く人はなかったが、何んと云ふても支那も大変革の時であるので金権成金も多少はあったのでそれ等の人々が看に行つた位ひで、大体日本人ばかりであった。そして杭州見物の団体旅行、南京への蘇州への団体旅行もあった。遠く山東省曲阜の孔子廟への参拜旅行さへもあったのであるが、近年ソナナ事は全くなくなった。コウした事をジツ注意して見て居る支那人があった。そして或日私に云ふのに、近頃日本人は色々の旅行をしなくなった。此れは私には大きな意味が見へる。日支事變の初めに、支那は戦争には負けるが経済では日本が負けると云ふたのは支那の声明であった。処が日本人は事變最中に兎に角色々の団体旅行などよくやって居た。そして吾々をして羨望せしめたものであるが、近頃それがサツパリと無くなったのだ。それは或は政府が命令で禁じたのかも知れないが、吾々から見るとドウも日本の経済戦がダンダン勝利しつゝある姿とは受取りがたいのである。タダに旅行だけでは無いが、私は此らはタダ旅行の事からだけで云ふのであるが老板ドウ思ひますか。と云ふのである。

実は私はそれ迄全く忘れて居たので此時ギョツとしたのである。ナール程且つての吾々との間に

は、華中鉄道が街の此処彼処に立看板を出して旅行会員を募集したものである。然るに二三年は全くそんな事は無くなったのである。考へさせられた。それは無論大東亜戦争と云ふ大國難が其後発生したのである。其処で日本としては最後の一人迄もと云ふ所謂決戦態勢を採用したので、日本人としては物見遊参〔山〕などは頭から廃止であるのだ。そんな時間があるなら勤勞奉仕だ煉成だ、そんな金があるなら國債応募だ飛行機献金だ、未だ敵人である四百万支那人の衆人環視の中で、十萬の日本人だけが小売商の整備だとか統合だとか云ふて騒いで美しく張って居った店は、ダンダンに閉鎖して行くか空の棚を並べる様になって来たのだ。日本人としての理屈は何んにつけても、第三者的立場から見て居ってそれが何んから見へるものであろうか。吾々は自分が忘れた方が都合がよいらしいからキレイに忘れて居るのだが、第三者は、イヤ当の相手の支那人は忘れては居らんらしい。そしてダンダン淋しくなる在留邦人の店舗の姿やダンダンと消へてしまった団体旅行などを併せて考へる時に、日本は軍と共に經濟的勝利を得て来たと思へるであらうか、ドンナにヒイキ目に見てもそれはダメであると私は思ふ。

人間は個人の場合と集団の場合とは違ふものである。そこで個人心理の外に群集心理と云ふものが學問として成立して居るのである。學問の群集心理の最もよい現象の一つには人気と云ふことがある。人気と云ふものは数字ではないから統計には出て来ない。イヤ出るのだが、商人以外の人々は決して重大と取扱はないものである。然し支那人はそれを非常に重大なものとして扱ふのである。外の事は云ふのを差し控へることにして私の商買〔売〕である書籍の上で考へて見様。最近の私の店はドウであるか、淋しい姿になった。それは私の原因ではないのだ。日本の出版統制の為だ。出版制限の為メだが、然しそんな理由よりも支那人の目には私の店の淋しさ丈けが印象されるのである。そしてそれは決して經濟的發展を物語って居らんのである。ドウしたらよいであらうか。理屈をつけたり言葉や文章で説明するよりもより短〔端〕的に眼に見へる有ったものが無くなった姿、其の印象は極めて短〔端〕的に深いものである。(了)(二六〇四、六、一〇)

モウ決定した？

米英軍の北佛上陸は独乙側の声明ではモウ追ひ払ふた様なことを言ふて居るが、此れはダメだ、上陸はドウにもならんと思ふ。此に第二戦線が出来たものと見てよいと思ふ。其第二戦線なるもの、力の決定はドウ見るべきであらうか。ドウ見るべき乎ではなくて、実力がドウであるか知らんが大体に於いて独乙は腹背に敵を受けて非常な窮地に追ひ込まれた事になった。コウなるとモウ問題は決定してる様である。後は時の問題と云ふ感じがする。(二六〇四、六、一〇)

注意を要す

吾々は講演をしても文章を書いても、自らにハッキリして居らん様な言葉や文字を使ふことはしてはならんことである。或る雑誌に書かれた或る文章の中に、「吾々は何ものからも影響を受けない処の青年の心を持つ」と云ふ様な言葉があった。一寸読んで見ると如何にも青年の心と云ふもの、純潔さが思はれる様な言葉であるが、考へて見ると此言葉など凡そ独りよがりの言葉である。第一今日人間として生きて居る以上、自ら以外から影響を受けないものは死んだ人間以外にはない筈である。影響を受けるから生きて居る人間であるのだ。凡そ生ける人間にして自ら以外の影響を受けないと云ふものは断然ない筈である。此う考へるならば前掲の言葉は明らかに無意味の言葉である。若い人が詩心のほどばしり的な言葉の響きに誤られてついヒリ出す言葉と云ふてよいと思ふ。自らにハッキリと解ってる言葉や文章は使つてよいが、馬々虎々で使つてはならん。(二六〇四、六、十)

○人間の本能は、腐らん物のみを蓄積する、腐るものは蓄積しない

○同じく、人間は自ら信頼するもののみを貯蔵する、自ら信頼しないものは決して貯蔵しない

現在の状態に於いて、国民に出来る丈け多くの貯蓄をさせることが一つの方法として行はれて居るが、其実行に少し無理がある様に思ふ。それは吾々は C.R.B から日本金への換算率として軍票十八円は即ち C.R.B 百元と云ふものである。此換算率によって吾々日本人の財産が日本円となって蓄積されることは当然過ぎる程当然の事であればならんと思ふ。処がそれがナカナカそう出来ないで、上海に於いては軍票の流通禁止と共に銀行の預金口座からも軍票口座なるものは取消されたのである。そこで吾々は、タダ日本からの商品仕入れの支払ひに此の換算率が使へると内地への送金に此換算率が使用出来るのである。処が送金には一人一ヶ月何程と云ふ制限がついて居るので自由に送金することは出来ない。此処に吾々の難みがあるのである。軍票預金は出来ない、内地送金は制限がある。吾々の手にする C.R.B が毎日の生活と、内地送金と、其他の必須入用と収支が差不多なればよいが、多少共尚は余猶〔裕〕があると云ふこと又は其上に経済を切りつめて余猶〔裕〕を造って貯蓄せよと云ふことである。

処が此貯蓄は物価が日進月歩で特に最近は大巾の値上がりをする為めに、持って居れば居るほど通貨としての価値が減じて来るのである。先日の集会でも話が出たのであるが、一昨年来愛国貯金を行ふてヤット千元出来た処が、此千元は今日ではタツタワイシヤツそれも並品一枚より買へない金高となったのである。つまり物価の上りが早くはげしい為めに CRB は置ざりになったのである。若しも当時から食物にか衣料品にかけて置く事が出来たらコンナみじめさはないのである。ナゼなら物の値段は暴騰して居るのである。吾々日本人の利益も損失も結局日本国家の利益と損失の一部ではないのであらうか。然し国策としての支那の財政の援助にでも少しでもお役に立つのなら未だ慰めることも出来るが、何んのお役にもたゝんタダ貯蓄した者が損する丈けであつては有害無益であるとか私には考へられない。国策としての貯蓄を奨励するにしても各地其特殊事情のあるものである。何処も同じ日本内地と云ふ考へは頭からダメである。観念的には何んとでも考へられるが事實はドウする事も出来ないのだ。其処に技術と云ふものゝ必要がある。其技術こそ政治と云ふものではあるまいか。日本金は吾々の絶対に信頼する通貨である。蓄積は信頼するものによつてのみ行はれるのである。信頼出来ないものを蓄積せよと云はれてもそれはタダ無理であると云ふより外ない。盟邦援助の為めだといはれた処で蓄積したものがドンドン無価値になって来ては、吾々何んの保証もして頂けて居らん者には背に腹は替へられないとなるのみである。(了)(二六〇四、六、十一)

#### 考へられるもの

巷間の流言飛語は上海其他中支の統制経済は失敗して居るとかイヤ成功して居るのだとか色々には言はれて居るのであるが、小倉経済顧問は着任早々新聞記者との会見に於いて思ひ切ったことを話された様である。申報社説は四月廿六日附けで面白い論文を書いて居る。此れが日訳を一寸拝借すると、

日文申報社論 第十三輯 上海漢口路三〇九号申報社週一回発行

小倉顧問の談話を讀みて 四月廿六日(水曜日)

国府最高経済顧問小倉正恒氏は昨日上海に於ける中国記者団接見の席上、中国経済対策に就き抱負を述べ且記者の質問に答へた。

小倉顧問曰く「上海経済の復興は今日中国経済の重要課題の一つである」「中国経済の最も重要な問題は如何にして人物資源を戦力化するか。如何にして民生を安定せしむるかにある」又曰く「統制経済の方法は決して一定不変のものではなく、環境に依つて異なるべきである、即ち中国には中国固有の民情習慣及び伝統があり従つて統制の方法は之に適合しなければならぬ。然らざれば統制の本義に反して却つて物資の欠乏を招くであらう。故に今後は過去統制経済失敗の原因を研究して之を改善して行きたい」と。之等は総て我々の之迄主張せるところと一致する。

我々は小倉顧問に中国の経済病態を救ふ名医として期待を寄せて居つたが、今同氏の談話を讀んで、盟邦人士中、中国の経済問題に最も的確なる診断を下す、正にその名に愧ぢざる名医なる事が

解った。小倉顧問は謙遜して自分は経済政策の責任者ではないと述べて居るが、正直の処、盟邦日本の実力に依らなければ我が中国の病態を取り除く事は困難である。従って我々は小倉顧問が診断を行ふ丈けでなく、進んで之が為め必要なる投薬及び手術を実施されるよう切に希望する。

之は中国経済の前途のみならず、大東亜戦争の前途に幸をもたらす所以である。

最後に今日の中国経済問題の危機は決して単に経済的措置のみを以て救ひ得るところに非ず必ず政治の革新を並進せしむべき事を忘れてはならない。

コウ書いて居る。私が思ひ切ったと云ふのは此文中の「統制経済の方法は決して一定不変のものではなく環境によって異なるべきである」と云ふ言葉である。此れは少くも現地お役人には晴天の霹靂であったであらうと思ふ。此言葉を具体的に次ぎに示された「中国には中国の固有の民情習慣及び伝統があり従って統制の方法は其れに適合しなければならない。然らざれば統制の本義に反して却って物資の欠乏を招くであらう」と指摘して居るのみならず、従来の統制を直ちに比〔批〕評して「今後は過去統制経済の失敗の原因を研究して之れを改善して行きたい」と極めてハッキリと今日迄の失敗を認めて居るのである。此三段の言葉は実に現地のお役人の方々が目を見はらされたものであると思ふ。吾々が且つてから主張した通り統制経済は失敗して居ると云ふ診断を下したのである。考へなければならん。(二六〇四、六、十二)

『神学承伝記』跡部良顕著〔実際は岡田正利著〕

「君の為めに親を捨るの道はあれども、親の為めに君を捨つるの道なし」

と云ふ文句が紀平博士の『臣民の道通義』の中に書いて居る。更らに同博士は、「我国体によって忠孝は不二一本となる」とも云ふて居る。又同博士は「此に忠孝といへば忠と孝と二つのことの様に受けとられ易いが、吾国では忠が大本であり忠あつての孝である。支那の如くに国と家とが別となり従って忠孝が二つとなって、君に仕へることと親に仕へることが矛盾する様なことはない」とも云ふて居る。

六月に入って

上海への米の搬入を自由にすると云ふ事から、一度六千三百元迄上った白米が五千四百元になって気迷ふて居った処、六月一日から上海週〔周〕辺に十個所の搬入口を設けて此搬入口から米の搬入を許し、搬入米は白米販売の指定商人の手で買ひ取らせる、搬入高の三割を軍用米として残〔し〕七割を民食米として市価によって買ひ取らせる云々と云ふ条令佈告が新聞に出ると共に、市内の白米はハネるハネる、七千元だ八千元だ一万元だ一万三千元だと急に暴騰をやり出したので、驚いて搬入口設置迄の自由搬入を許すと云ふ事が声明された。サア大変だ、米は上海へ上海へと搬入されて来る。そして米価は一万元と云ふ処で上下して居る。

此時に当ってメリケン粉も亦た上昇したと見へて大餅油条が三元から一躍して五元になった。イヤハヤドエライ事である。然し高い事は高いが、此の調子なら当分米に不自由はないと安心出来た。(二六〇四、六、十三)

新聞だ

最近上海の土地の値がドンドン上ると云ふ事である。それは重慶側から儲備券を買って上海の土地を買ふからだ云ふ事である。果して如何なる理由によるのか知らんが、上海の土地を買ふと云ふ事は兎に角事變の結末に光りが見へ出したのではあるまいか。好く取れば上海へ出て来る気配と見へ、悪く見れば儲備券の「仮票」ではないかと見られる。果して如何、今はタダ新聞である。(二六〇四、六、十三)

### 初警報

六月十三日夜半（午前三時十分前）上海始めての空襲警報が鳴ったが、十一日夜半にも警戒警報は鳴ったので割合に落ついて行動も出来又待避も出来た。然し幸ひにして事なくやがて又警戒警報になって、十四日の午前七時頃解除になった。（二六〇四、六、十四）

### 上陸軍の状況

欧州上陸軍は北仏ノルマンデー半島に於いて巾八十キロ深サ十六キロに及んだとの事である。ローマを放棄した独乙は又北仏に上陸されて此に独乙は大包围に陥った形である。東線はソ連南部は米英の伊太利からの北上で、西部は即ちいよいよ上陸軍である。（二六〇四、六、十四）

### 物価

最近迄点心は排攤子は五元が単位であったが、昨今一躍して倍額になった。即ち十元で一個と云ふ標準である。然し大きさが少し大きくなって居る。此してドンドンと上って行く物価は今日モウドウする事も出来ない。タダ成行きにまかせるより外ない始末である。（六、十四）

### 機構か人か

大使館事務所の大大の機構の改革が発表された。機構の改革か人と云ふ事がシミジミと考へさせられる。（六、十四）

### 古語に言ふ

人多き人の中にも人ぞなき、人となれ人人となせ人、と云ふことが言はれて居る。此れは世の中の色々の運営は人が中心であると云ふ思想に淵源して居る事は云ふ迄もない事である。私共は此思想で育てられて来て、人が物を支配すると信じて来たのである。処が例の欧州から物が人を支配すると云ふ考へからの理屈が流れて来て、時に大に迷はされたり騙されかけたりした事があったが、幸ひにも私は支那と云ふ事に没頭して居った為めに引きづり込まれる事はなかった。そして冷かに眺める事が出来た。そして危険と云ふ事について迄危険とは偏する事であると云ふ解釈迄覚へる事が出来た。

### 人が物を支配する

### 物が人を支配する

それは物よりもより偉大なる力を持つて居る人があれば其人は確実に物を支配して居るのが事実だ。物が人よりもより偉大なる力を持つて居る時に物が人を支配して居るのが事実である。そうして見ると、或る人は物を支配し或る人は物に支配されて居ると云ふことになる。然れば何れが間違ひと云ふ事のない、何れも事実である。処が多くの人々は此物が人を支配すると云ふ流行に押し流されて終った。それが唯物論流行時代であったのだ。此頃も此流れが未だ跡を断たないらしく、何んでも機構の改革さへすれば好弁と心得て居る様な人がナカナカ多い様である。

事変以来各機構の改革された事幾ばくぞやである。而も人間はタダ甲と乙とが入り替るとか丙と甲とが入れ替るとか云ふ丈けである。此れでは問題にならぬではないか。つまり機構と云ふ事に可否がある様に心得て居るからである。然し決して機構丈けでドウなるものでもない。人と機構とがピッタリせなければ決して成功しない。人と機構とは天秤棒の両端である。（二六〇四、六、一四）

### 時が来る

帝国地方行政学会が上海へ出て来て何か興亜院と連絡してコソコソとやって居ったが、トウトウ今度

引揚げる事になったとの事だ。そして其後の仕事は大使館事務所から内山書店へ依頼される事になる様だ。何んでも引受ける。本屋の大詰めも恐らくは又内山書店が引受けるより外ない事になるのではないかと思ふ。何んでも引受ける。決して今日は拒まない。積極的には此れからである。(六、十四)

#### 新聞の頁

時局に対して協力する意味からであるが、新聞もダンダンと其頁数を減少して来て現在の如く毎日四頁で日曜は二頁になって居たのであるが、今度はよいよ木曜日も亦た二頁にするとの事である。又止むを得ない事ながら恐らくは近い内に二頁が毎日になるのであらうと思ふ。然し此れも未だしである。遂に新聞は一斑一部と云ふ事に迄なつて、毎朝六時に集つて班長から新聞を読んで貰ふて散会すると云ふ事に迄なる可能性は多分にある。各雑誌が已に減頁から減刷になつて班単位になつて居る事から考へたら、考へられる事であると私は思ふ。(六、十五)

#### 敵機の影

十二、十四両日の夜半月明を利用して敵機が上海方面を偵察したので初めての空襲警報が発しられた。此れは現在進行中の中部(京漢、粵漢兩幹線)作戦の余波に相違ないと思ふが、然しいよいよ上海も決戦圏内に入った事がヒシヒシと感じられる次第である。此くの如き時機に際して大使館機構に大異動があつて、一層何んとなく緊張させられる様である。

#### 講演の中に

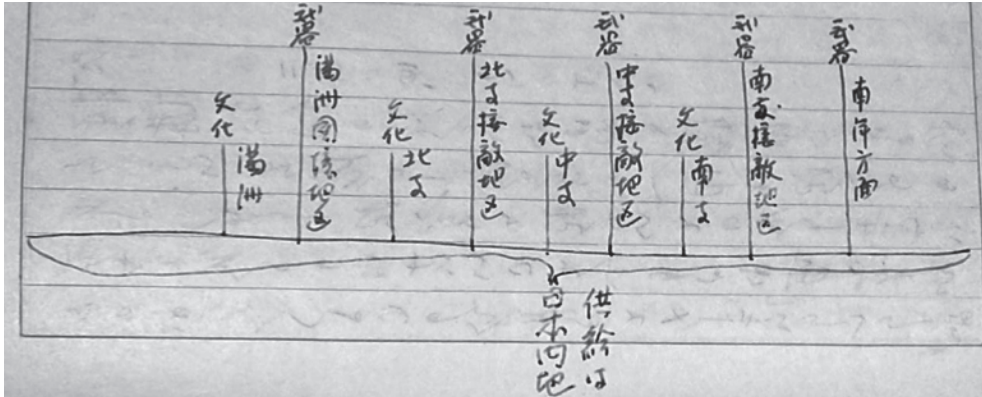
武内商工會議所理事長が長江会の為めに講演をしてそれが大陸新報に発表された。題は「産業革命をやれ」と云ふ事であつて、統制経済の要訣として左の五項を指摘して居る。(一)官的統制より民の自治的統制へ、(二)ギルドの活用、(三)安定物価政策、(四)物資の有機的交流促進、(五)中国経済の統一と云ふて居る。面白い講演であつた事と思ふが、此等〔の〕事を一々吾々日本人が口を出さずに支那人にまかしてやらねばできない事である。

#### 現実と理想

又しても書いて見るのだが、現実に永い経験を持つて百を生産する機構がある。此生産を二百にせねばならん。而もそれは現在に必要であるのだ。吾々商人であれば此時に現実の機構を強化する事を考へる。それは已に百を生産する実力があるのだ。タダ倍加すればよいのである。吾々であれば人数を増すとか区域を拡大するとか賃銀を増すとかと云ふ様な方法が実行されると思ふのである。処が支那の生産力を増大するに當つては、従来の経験で実際に百を生産して居る機構を頭から破壊して、未だ経験をした事のない寧ろ理想に属す(支那人に云はせると理想と空想とは隣り合せだと云ふ)制度を持つて来て此れを強行して、生産を二百今得様と云ふのであつた。そして強行して見た処が生産は増大しなくて反つて減退をさへ見せん事が沢山ある。ナゼであらうか。原因は支那人の当業者が経験を持たないと云ふ事が一つの大きな原因であると共に、頭で働く<sup>と云ふ事</sup>の極めて下手な支那人であることが第二の大原因である。第三は理想の鳥は捕へる迄にナカナカ時間がかゝる事と捕へて見ると青い鳥ではなく黄色かったり白かったりする。そして青い色は更らに遠ひ彼方に居るのが見へるのもであるとメートルリンクが云ふて居るのは、古いことであるが事実である。つまり現実と理想との取り違ひらしい。矢張り現実の介入は現実の機構設備の強大が最も適当である様だ。(二六〇四、六、十五)

#### 現状の看方

昔の戦争は巾が狭まかつたから武器が第一義で文化は第二義的であつたのだが、現在の戦争は非常に



其巾が拡くなって居る。其為メに同年同月同日に或る地域に於いては武器が第一義であり又或る地域に於いては文化が第一義である事があるのである。仮へは次の様になるのである。(手書きの表挿入)と云ふ風に、或る地区に於いては文化、或る地区に於いては武器が同時に第一義的に必用〔要〕なのである。仮へば中支が食料を供給させるにしても、米もあれば油もあればメリケン粉もある塩もあると云ふ風に色々ある様に、巾が広がると同時に戦争と文化とを平行させねばならん事になるのである。全供給基地の考慮を要する点であると思ふ。(二六〇四、六、十五)

池田克己曰ク

内山完造が頻りに支那を挙げる根定〔底〕は、日本の欧化米化に対する憤激である。少くも日本が欧米化したことに憤慨して居った時、東洋故〔固〕有のものが適々支那に於いてありありと見へる処に一脈の喜びを覚へると共に、いよいよ其欧米化日本への憤激が爆発したのである。此れは見逃してはならん点である云々。(二六〇四、六、一五)

三度警戒警報鳴る

六月十五日午後十一時半第三回目の空襲警戒警報鳴る。然しゆっくりと準備が出来た。ドウした事が隔日になって居る。今日は子供等を日本へ送る船票を買って呉れとの民団からの通知があったので買ひにやった。処がドウした事が都合によって一寸売止めと云ふ事で明日来て呉れと云ふ事になった。

四度鳴

六月十七日午後九時警戒に入り二時間にして解除されたが、昨十六日午前二時北九州が式十機ばかりの敵機によって爆撃されたとの事である。然し半数は撃落したと伝えられて居る。

北九州の空襲

十六日午前二時小倉八幡方面上空に式十機ばかりのB29型米機が現はれて投弾したとの事である。然し被害は軽微で十機を撃落したと云ふから愉快である。又同日午後二時頃南朝鮮に数機の空襲があったが被害なしとの事である。漸く決戦事実が見られる様になった。

六月十八日午後五時半

乗船して夜十時頃出発、極めて安らかな航海をしてよく寝た。

同十九日洋上の暁

誠に朗らかな朝であった。朝食は大豆入りの飯に味噌汁と納豆、千切の煮附であったが大変甘かつ

た。伊藤事務長と同席、午前十時頃黄河流域に入って今迄青かった水が再び濁って来た。気になるのは芳枝等三人の事である。何んでも黒龍江丸は今日出帆するらしいのであるが、ドウカ事なく帰国する様にと祈って居る。

航海極めて安然たり。食事は昼はスープ、魚、ウドンの三品で三時には紅茶が出て夕食はスープ、肉、カレーライスであった。昨夜も同じであったがコレ丈けの食事でも腹は我慢出来るのであるから、昔の船の食事は少し度が過ぎて居ったのである事が解る。風呂にも浴れて呉れるから何んと云ふても船賃は安い。船賃と人の月給と本とが一番安いと云ふ事になる。

#### 夏巧尊先生の詩

友松圓諦氏が来て夏先生に紹介した処、一日夏先生の南伝大蔵経翻譯処である法蔵寺に友松先生が夏先生を訪問した時丁度昼であったので夏先生がウドンを食べ居ったので友松先生に勧めた処食べると云ふので共にウドンの昼食をした。其時友松先生が何か書いて呉れと云ふたから一つ詩を書いて上げたと云ふて私に夏先生が后で云ふた其詩は、

君来正值米荒劇、梵寺凄清麵共餐、  
万一太平真絶望、重逢当在妙蓮端  
と云ふのである（上海の実際である）。

#### 六月二十日

朝青島へ入港した。早速上陸して博文堂書店を訪問したが、本は少ない而も人手不足で遂に支店を閉鎖したとの事であった。昼食を差上げるとの事であったが、丁度警戒警報が鳴ったので御厚意を謝しつつ、帰船した。途中で解除になったが其まゝ十二時に帰船した。山東落花生を買った。花生米は百目が三円五十銭から四円で油炒花生は五円であった。大餅は色々あったが何れも一個一元で上海の三倍の大きさである。粽子が沢山売って居るので買って見た。一個が五十銭である。中味が面白い。名物の粟に糯米を少しばかり入れてつなぎにして紅棗を三四個入れてあるので結構其甘味で食へる。五十銭と云ふ事は二元八角と云ふ計算であるが、中味が粟であるので相当高い値段ではあるが何処も同じく日本人商店は空棚で、支那人店ばかりでなく其中央地域（日本人の）に沢山の排攤子が出て餡類せんべい類を売って居る。せんべいが百目八円上下、餡のものは百目が十円位である。餡類が七八円から十円である。タゞ上海の貧民共に見せてやりたいものは路上にボロボロとコボレて居る黒い石炭のコボレである。此処では拾ふ人もない。

山東名物は何んと云ふても埠頭に山積されて居る黒い石炭と白い塩と魚と落花生と（青島ネギを見ない）杏子などであらう。玉子が一個五六十銭から一円迄ある。大小による値違ひである。柳合〔行〕李類は上海の方が安い。上海から青島への荷物は支那の毛辺紙や菴、茶が多いが、紙も茶も浙江省産であるがお茶の荷造と云ふ事で注意すべき事は、支那式の竹でアンダのは破損が多い、安平来で包んだのが比較的安である、竹でアンダのは十個に一個位破損が見へる。紙の荷造りは比較的破損が少ない様である。

#### 苦力の赤裸

上海の苦力と青島の苦力とでは見た目に色が違って居る。青島苦力は皆んな身体に衣を纏ふて居る。そしてそれが悉く黒光りに光って居るので一目して黒ん坊と云ふ感じである。処が此等苦力は荷物の破損から定めし色々な物を盗むであらうと想像して居った処、此れは又案外にも彼等は盗む事が非常に困難である様だ。なぜなら頭から物を匿す場所がない。一つかみのお茶も式三十枚の紙さへも匿すべき場所がないのである。盗みは反って苦力よりも上に居る監督とか見張りとか、つまりポケットの数が多い人間程盗みを多くするものである事と私は現実に見た。苦力等は流石に家も持たねば家族もないであ

らう。自分で食ふより以前の物を盗まない様に出来て居るから面白い。盗みする物は家族を持ち家を持つ者の方が多いのだ。

### 苦力の生活

一日の工賃は七八元である。すると饅頭一個が一元であるから一度に三個食べると工賃では不足するが、五角の粽子を一度に四つ食ふか饅頭貳個食へばヤット一、二元の余猶〔裕〕があるのだが、此れはドウヤラ出来ない相談である。つまり七八元から十元の日当で食ふてチョンと云ふ処らしい。

### 警戒警報

突然として警戒警報鳴り渡るや諸人の狼狽は一方ならず私も早々にして帰船したが、聞く処によれば最近青島の治安非常によるしからざる由徹夜の自警団をやって居るとの事なり。

### 十目の見る処

青島の大餅は大変安いと、私が買った粽子も安いと買って来た。果して安い船員の支那人は悉く大餅と粽子とをウント買って来る。誠に十目の見る処十指の指す処である。

### 六月廿一日

航海はいよいよ安航である。青島を出てから山東角へ向って峨々たる山脈を眺めつゝ日はくれた。今朝は勃〔渤〕海の只中に白波蹴って上るが如しである。午后0時半大連港外に着いた。上陸は一時半、大和ホテルに入る。先づ、ココハテンキヨシ プジ カン と上海へ打電して静かな三二一番の部屋に落着いた。一目して大連が非常に落つきを持って居ることが感じられたが、一方其埠頭の淋しさから見ても不印である事は何処も同じである。

### 満洲旅行について

吾々は大連に上陸するには船中で一度税務署（関東洲の）の荷物の検査を受けねばならん。綿布類やお菓子の少量があるとスグに課税される。現に私は金四拾八円の税金を払った（洒木棉四反とタオル一打、靴下半打とビスケット半打）。而も此税金は大変に不同がある様である。官吏などはウント安くて済むらしいが、吾々は少々お安からずである。埠頭に上陸してから港橋（電停迄七八丁）は自らで荷物を提げて歩くより外ない（船内で預ける事も出来るが色々被害がある様だ）。乗物はナカナカ車も馬車もないから電車を利用するのが一番便利だ。天野君が来訪されて夕食を共にして、一寸食後の散歩を大連神社へ廻って榊町のお宅を訪問して、楓町の小原君の宅へ行った。夜十時自動車を雇ふて帰宿したが夕食の品々は、スープ、魚、鳥、大豆飯、お茶迄ついて三円であるから安い。上海へ到着電報を打った。

### 六月廿二日

朝になって昨日の電報が打てないと云ふので電報局から返送された。更らに、アスハウテンヘユクヨシエタツタカと打った。朝の食事はトウスト一枚、野菜の煮汁一つ、コーヒーパイである（金一円ナリ）。新聞はサイバン島方面の重大性を伝えて居る。ドウカ如何なる事があっても勝利万歳である様に祈って止まない。十八日長沙陥落を見てヤ、安心はしたが、此方面は重大ではあってもサイバン島の比ではない。断じて撃退せなければ祖国の危機である。

小原君の案内で終日暮らした。先づ満洲書籍会社支配人大森さんと会談して出荷の都度電報を約束した。此処でも出版協会が出来る準備中の由。勝進社と云ふ新しい出版屋さんが出来て小説一つ参考書一つ出版されて居るが紙は悪るい。大坂屋号で浜井さんに会った。東京の大坂屋が文求堂と合併した為メにポケット日華辞典を大連で出版する事にした。定価は多分九円位いとこの事三千冊注文した。速成上海語五千、速成北京語も千、簡易支那語会話篇も千注文した。日本文法精義と日本語会話文法とは各三

千注文した。速修日語会話と今一種は各千冊注文して置いた。平凡社の海軍魂陸軍魂空軍魂を各千づゝ注文して置いた。此れは丁度紙型が来て居ったから直ぐ出来るとの事である。

帝国銀行へ行く。櫻井さんが支社長で浜田君が次席である。小原、浜田両氏を伴ふてホテルで中食して、一木洋行を訪ふて、朝鮮銀行の大草先生を訪問して、小原君の招待で江商の主任富久君（モト北京メンソレータムの人）と共に星ヶ浦の星の家に自動車を飛ばして御馳走になって、楓町の宅へ戻ってお茶をよばれて帰った。大変に今日は蒸し暑い日だ。大連汽船会社へ切符を頼みに行く。廿六七日頃通知するとの事である。頼んで帰る。書院の学生が二人ヒヨッコリと現れたので何処へ行くと聞いたら、張家口から今ついたと云ふ事で宿もないと云ふ話から小原君が家へ泊めてやると云ふて引受けて呉れたので助った。小原には矢張りよい処がある。彼れは男だ。私は心の中で感謝した。

満洲公論六月号に「點頭か搖頭」を出した。一つ小説を読んだ。「老莊稼」と云ふのであるが甚だしく不自然な感じがした。タゞ役人の報告書と云ふ感じであった。

六月二十三日

今朝は大変霧が深い。午前九時の「鳩」で小原君に見送られて出発した。車中昭和通商の佐久間氏の御厄介になった。午後三時四十分奉天着、森川、大谷両氏及二店員の方の出迎へを受けて奉ビルに宿す。夕食を森川、大谷両氏に御馳走になった。一風呂浴びて後々迄森川氏と話す。車中の飲は「楊」が根本から芽を出して幹全体が枝に包まれて居る姿は珍しいものだ。鳥類が少ない、村に家禽が非常に少ない、家畜も亦た多からず僅かに牛馬と山羊丈けで豚に至っては全く影だになし、鶏も家鴨も見へない。名も知らぬ黄や白い草花が沢山に咲いて居る。

奉天も新京と同様に現地出版を盛んにやるつもりとの事、新潮社、富山房、有斐閣等が頻りに進出をはかって居るとの事である。森川氏が四庫全書の中の『西域同文志』一千部限定本を出すとか云ふて居る。

六月廿四日

朝森川氏から朝食の準備が出来たと云ふ案内を受けたので 256 の室へ行った。チヤンと弁当が取ってあった。味噌汁と野菜の煮付けであった。実は昨夜は大阪〔坂〕屋の大谷氏と森川氏に招かれて夕食を御馳走になった。而も三人で四人前の御馳走で私が二人前頂いたのである。朝食を終つて森川氏と二人で出かけて大坂屋と弘文堂の未だ開けてない店を見たが、此処は全く内地品がなくなって居る。弘文堂宮坂氏の話では京城の書店には沢山の本があったとの事である。奉天の出版は大坂屋、吐鳳書坊、満日、千代田書房、大東亜社などが頻りに出版をやって居られるが、何れも安物が多いがダンダンには出る様である。

満配支店を訪問して田中氏と話した。昼食は森川氏の店で御はぎ牡丹餅の御馳走になって、午後一時から同業者の会合があつて一席上海の状況を話した。そして皆さんからも色々承つた後、大坂屋の大谷さんを同道してお茶の御馳走にお宅へ伺つた。そして、支那民話集千、満支典籍攷三百注文した。

関屋君の原稿を見たモウ少し短縮する必要はあるが出してよい本と勤めて置いた。夕食は満配田中氏の招待で森川、宮坂と大坂屋の西川（此は西川博の兄であつた）が陪席して大和ホテルのグリーンで満腹した。そして宿へ帰つて暫らく森川氏と話した。宿賃は森川氏が支払ふて呉れるなどの事で任かせて帰る事にした。かどや書房は二十年前に上海の毎日新聞に居った神戸君がやって居るとの事で訪問した。医大の前で医書を専門にやって居る。『薬草満洲』を一冊買って色々話して帰った。書籍の注文は別紙の通報書によって行つて居るとの事である。

いよいよ明日新京へ行く、前八時半発。奉天で絶対に好い物は清冽な水道である。地下六十尺に流れて居る水脈から（地中の河）汲み上げたまゝの水を鉄管で送つて居るのであると云ふ。水道の水の欠点

は冬冷かで夏暑いことであるのに、此処丈は夏冷かで冬温かいのである。イヤハヤ驚く可きものである。疲れて帰って冷かな水で洗臉すれば生氣自らに還る。自然の力をハッキリと見ることが出来る。コンナ事が人力で出来るか。奉天の様な処で此れは何んと云ふても第一義的条件である。

六月廿五日

前八時半奉天發新京に向ふ。雨降る。森川氏弁当を作つて呉れられて雨中を駅迄見送つて呉れられた。実に親切な人である。車中で満洲興業銀行の中居氏に会ふた。昭和武年頃上海の朝鮮銀行に居つたとの事で貴方上海の内山さんですかと云はれて奇遇に驚いた。新京迄話して来た。

午後一時新京着、開原君が出迎へて居つて呉れて太陽ホテルと云ふに入る。イヤハヤ下宿屋然たる宿である。然し仕方もなく我慢して宿る。巖松堂の西村氏と時代社の渡辺氏と共に巖松堂でお茶を頂いて話した。夕飯は香蘭で開原氏の御馳走になった。十人の予定が四人しか居らなんだ点から見ると内山と云ふ人間に興味がないらしい。或は開原氏が社内で人気がないのかも知れない。日満商事の堀君へ電話したら夕方宿へ来て呉れた。実に感謝である。太陽ホテルと大きな看板は出て居るが中は丸でなつては居らん。何んの事はない日本人の顔よごしである。ブンブンブンと蠅が来るので寝られない。便所には糞が山積して居る。此れが首都の中央に存在が許されて居る宿としては又首都の面よごしである。

六月廿六日

新京の夜は九時半頃迄明るくて新京の白夜は四時に明ける。

偶感

今度の旅行で特に新京の此太陽ホテルと云ふ宿での偶感では、全く人間味と云ふものが無くなって居ると思ふ。親切と云ふものがミジンも見られない。支那には親孝〔行〕する者が無いから廿四孝が顕はれるのだと云ふ筆法から云へば、道義地を払ひしが故に道義が叫ばれて居るのだとも云へる。親切と云ふことがドレ丈け吾等の様な旅人を慰めるものであるかと云ふ事は云ふ迄もない事である。反対に不親切がドノ位イ骨身に沁みるものであるかと云ふ事は云ふ迄もないことだ。旅人が不親切な宿に寝る位イヤな事はない。私は此宿でそれを沁みじみと味ふ事が出来た。大連の大和ホテルは母国の様な気がする。ホービルホテルは森川氏のお陰で森川氏の宅に泊めて貰ふた様な気がした。此ふした不親切が普通であると云ふことが此れから前途内地の宿で繰り返へされるのだと思ふと、日本の味がユウツツになる。特に旅行者が箸を持って歩るかねばならんと云ふ事は何を物語るものであるか、イヤハヤである。

明日の出発は一日延期して廿八日に出發する事になった。今朝は堀君が来て呉れて、満配は午後の二時からと云ふ事にして昼食を堀、吉木、多門君と共にした。紀念会館特別室で出版協会の黒石、満配の田宮、開拓文化協会の小野、国民画報社の奥、興亜雜誌社下平、公論社小原氏と四時迄懇談した。それから中央銀行へ行つて、廣田、辻両君と共に夕食を今一人の辻と佐野とで中銀クラブでして、日本間の座談会に出た。公門君を初め書院や上海縁故の人々式十数名と九時過ぎ迄懇談して、吉木、佐藤両氏に見送られて宿へ帰つた。是れで奉天で一回、新京で二回漫談した。

満配の中の空気は開原君と他の人とがスレて居ることがアリアリと見へる。開原君が私を香蘭で御馳走してくれるのに十人も出席すると約束して置きながら遂に三人より来なかつた。そして今朝事務所を訪ふたのに昨夜は失礼しましたとの言葉を云ふものがない。開原君が如何に扱はれて居るか十分に解る。コンナ会社を宛てにはして居られない。夜奥一氏來訪。満配会社は資本金式百万円で手形の融通が四百万円と云ふ事であつたのだが、会社が出来た頃には式百万円は已に食ふて終つて居た。信用はゼロである。然しタゞ社長田中氏の人柄だけで今日も尚ほ継続はして居る云々と聞いた。酷評とも思はれない様である。四平に仏学書局の大藏經南伝大藏經は現物があるとは思はれないが、然し今日の金融状態から云ふと送ると云ふ事が不可能の様である。つまり満洲国の物を買ふと云ふ事は上海の金を持って満

洲国へ移す事であるから、満洲国が日本内地と同様になった今日つまり上海の在金が減少すると云ふので上海は出す事を止める様にして居るのである。大連への送金が受取るに許可制になった所以である。満洲国としてはインフレの集貨にヒッカ、る事であるので物の出る事を喜ばないと云ふ。結果として輸出を喜ばないのであるから大蔵経の様な大きな物の搬出は先づ不可能と思ふ。大連からなら方法もあるが四平では方法がない。

満洲国籍の日本籍貫人と云ふのが満洲にはある。それは生れは日本内地であったが満洲国に於いて満洲国籍を獲得して居る人々である。奉天とか新京とか其他満洲国内に於ける企業法人は満洲国人でなければならんと云ふ事があって、奥一氏の如きは立派な満洲国人であるとの事だ。其代り大連となると関東洲であるが故に今度は日本人でなければ法人企業は許可されないとの事である。イヤハヤ厄介千万の事である。

六月廿七日

朝山口慎一君来訪、正午再会を約して満配へ行き、大同印書館を訪問して村上氏と会談、「大東亜共栄圏地図」100本、『中国商業習慣大全』300冊を注文した。

国通に松方氏を訪問したら東上中、満日に後藤和夫を訪問したら大連行、遂に山口君と満洲公論社の小原氏を訪問して、吉木君と共に駅前のロシア料理で昼食を共にして、一先づ満配に帰り、宿に帰って雨の晴れるのを待って、富山房を訪問浅利氏と話し、有斐閣と同道で山茶寮で夕食の御馳走になって、宿へ帰った。中食后自働車を飛ばして満映を見物した。一人内山ファンあり根岸君と云ふ。上海汗語迄取り寄せて読了せりと云ふ。面会した、大変喜んで呉れた。丸善の店員が私と直接話が出来たと云ふて感謝して呉れたのと好一对であった。

新京では度々電が降った。大きな電が降ると作物が困ると皆んなが心配して居った。満洲は雨が多くなったと云ふことを聞いた。人が多くなれば温かになると私は且って云ふた事がある。

六月廿八日

朝八時半の「鳩」で南下した。車中昔上海の満鉄に居った(2, 3字分空白)さんに会った。長崎の図書館長益田さんによく似た人である。暫らく話したが今は奉天の華北交通に居られる由。午後八時には大連に帰った。森川氏が三人連れて出迎へに行つて居つて下さったのに、迷子になって大和ホテルに落つた。上海から電報が来て居つて芳枝も無事に芳井へついた模様で安心した。小原君は奉天へ行った由。金州附近リングが沢山なつて居る、今年南満は豊年らしい。奉天新京は雨であった。

六月廿九日

暴風雨

満洲の南北縦貫鉄路を新京迄通つて見て、ツクヅクと私は満洲は日本の生命線であると云ふ標語を何故に守り抜かなかつたかと思ふ。私は七年前に十五箇所を廻つて、満洲へ日本の分村分県を徹底的にやれ、次男坊以下を強制的に分村すべきだと書いた事があつた。今日再び満洲を見て「より強く分村せよ分県せよ。そして土に足をつけよ。山東人を自ら働らけ」と叫ぶものである。易い文化とか文明とか云ふ様なことは抜きにせよ、忘れて呉れと云ふ。北支も中支も場合によっては放棄してもよいと思ふ。イヤいさぎよく北中南支を放棄して満洲を守れと云ひ度い。満洲さへ守れば日本の人口問題は解決出来るのだ。下司の知恵は何日〔何時?〕でも後からだか、「五千万人満洲分籍」を主張した私の考へに誤りはなかつた。満洲へ戦費一ヶ年分をつぎ込みさへしたらよかつたのだ。満洲の土の上の舞踏を多くの邦人は考へて居る。それは遂に山東人にしてやられる事である。文化とか文明とか云ふ様な舞踏ではなく、土に食ひ込む脚が土にメリ込んで踏んぱたまで踊れない、それでなくてはダメなんだ。考へ直

さねば満洲にさへも居られなくなる日が来ると私はつくづく思ふ。

#### 満洲再感

七年前の冬に四十日の往復、十五個所の講演五十回をして「シアターは歩く」と云ふ旅行記を私は毎日新聞の大陸版に乗〔載〕せた。其中に、分村分県によって五千万人満洲移住を主張した。其方法として次男坊以下を抽籤によって強制的に分籍すべしと云ふた。今日私は其満洲の最高の気〔季〕節である青き世界を見てつくづくと誤にあらざりし事を目のあたりに見て居る。山東人の働らきは吾々がせなければならん事なのだ。安易な文化生活、文明世界とは畢竟「土の上の舞踊でよりないのだ」。足を土にメリ込まして踊ることが出来ない姿が其世界が吾等の世界なのだ。満人をさげしむ人々よ、満人に泣言を云ふ人々よ、自らを顧みよ、足は土にメリ込んで居るかと私は云ふ。興業銀行だ、大企業だ、興農金庫だ、合作社だ。それもよい。然し然した。吾等の足が大地に食ひ込まれて動きがトレない姿こそ最後の世界でなければならん。

◎大連大広場の午後二時、雨ははれたが風は未だ強い。

青いお空にお日様出たが、追ひかけごっこ雲のあし速い。広場の藤棚ベシャンコになった。ゲートルに兄さんにモンペイ娘、電車待つ人、走る人。港にや白浪おどってる。(了)

#### 六月の満洲

満洲は今緑の世界だ。曠野に働らく山東人は大地にはへてる様だ。辛々苦々粒々辛苦。流す血の汗、其色が青いのだ。

#### 満洲漫見

東の地平線から上って西の地平線に入る。太陽も月も星も満洲は今緑の世界だ。曠野に働らく山東人は大地から生へてる。辛々苦々粒々辛苦色なき血の跡を見よ。あれこそ吾等自らやらねばならん事であるのだ。焼直しの文明がどうしたと云んだ。文化生活とかの真似事がなんだ。土の上の舞踏ではダメだ。足が大地にメリ込んで動けなくなった時、それこそ吾等が望む最後の満洲である。威張るな、泣くな、シッカリ頼むよ満洲の兄にやん。(二六〇四、六、二九) 於大連(了)

#### 六月三十日

午前中満鉄図書館を見物して特に貴重書籍を見せて貰ふた。「耕織図」の色々は大変面白かった。然し貴重品はつまり骨董品であるので実是一向気乗はせんが、叢書類が沢山集められて居るのは羨ましかった。『古今図書集成』『四部備要』『四部叢刊』『四庫珍本』等、モウ今では大変な貴重品である。正午興業銀行支店長山成氏に招かれて銀行連中の午餐会で一席漫談して、江商で切符を受取って、又図書館で天野氏と丁度来合せて居った伊藤武雄氏と三人で五時迄話して、宿へ帰ったら浜田君が来て待って居って呉れたので、又同道して横井氏と三人で又七時半迄夕食を共にして話した。此れで今日のプログラムは終わった。明日は朝の中小原君に会ふて、午後二時から図書館で漫談する。午後四時半から森川氏の茶と夕食の会へ出る事になって居る。そして大体此処は了る筈。「ヨシエブジツイタカヘン」と打電したのが今日返事が来た。「ミタイツクルカ」と返事があったので安心した。

#### 七月一日

小崗子へ行く。露店で頻りに生きた貝を食べて居る。少し長い小判型の貝殻に毛が生へて居る。中は赤黄色の美しい味がある。丸々と太って居る。試みに身を取って醤油をつけて食べる。ナカナカ甘い。名は「ハイファン」と云ふ。多分「海蚌」であろうと思ふ。昼食を天野氏と二人で飯館子で十景湯と

「煎餅」式枚でやる。煎餅は「小米包米」の煎餅である。日本の煎餅の本家らしい。合計三円也。飴を売って居った。一本が十銭であった。此れはナカナカ高い。油炸糯米糕を売って居った。一ケ式十銭であった。

満鉄図書館で天野氏の紹介で式時間ばかり話した。そして更らに満洲図書文具社長森川氏宅での会に出席して、帝国銀行の中島、奥津両氏を加へて又式時間話した。夕食は大変な豪華版で御馳走になって、十時警戒管制下を送って貰ふて帰った。

小原君から電話があつて明日江商へ十二時半迄に来て呉れとの事で約束した。いよいよ明日出帆との事である。

七月二日

いよいよ今日の出帆である。原稿の返送を江商へ頼んで大形耕平氏を試験所に訪ねた。近処の住宅へ行った処ビックリして居った。色々と話をして電停迄送って呉れて別れた。小原と同道で乗船した船は満員だ。三時出帆した。左は陸続きで右は沢山の島々がある。午後八時分らぬ島陰に一泊した。ナカナカ要〔用〕心して居る。

七月三日

午前五時に目が覚めてエンジンの音が始まった。洗臉せうとしたが水が出ないので又寝た。六時半頃と思ふ、妙な夢かウツ、か幻か解らんが右の奥から二番目の歯が抜けたと思ふて目が覚めたので自らの歯を見ると大丈夫であった。今日はよい天気で終日池の表の様な海を走って居る。今夜は泊らないで走るとの事である。

七月四日

今日も浪静かな海を亙って居る。何処であつたか左の方に濁水の流れがあつた様で海の水が少し濁って居った。今日も一度浮き袋の練習があつた。船中の無聊は漫談と読書で消して居る。小原君は門司から上陸するとの事である。関東洲丈けでなく満洲国内地とは税関の墻壁が除かれたと聞いて居つたが、矢張り兎に角税関の検査があつた。朝鮮多島海の景色は実に好い。瀬戸内海の様である。船中寒山詩は実に面白い。特に

杳々たり寒山の道、落々たり冷澗の浜、  
啾々として常に鳥在り、寂々として更らに人無し、  
淅々として風は面を吹き、紛々として雪は身に積む、  
朝々日を見ず、歳々春を知らず。

の詩はトウトウと朗吟すべきである。今夜は多分木浦あたりと思へる島の影に停泊したが、遂に天明を待つなく夜半の月明に乗じて抜錨した。乗船以来食事の変化は下痢症となつて少しも治らない。

七月五日

夜半の抜錨は已に午前一時であつた。ドンドン船は進んで午前七時には前面に大きな陸地が見へたので或は已に関門ではないかと誤つた位いであつたが、それは対島であつた。島に沿ふて進み正午頃には壱岐が見へて来た。午後四時には遂に六連島を過ぎて門司の岸壁に横着けになるべくあわやと思ふ切〔刹〕那水上署のランチ来りて何か手紙を渡した。如何なる事のありしか不知、船は又エンジンをかけて進行を始めた。日夕、門司上陸は明日になりましたと。而して船は長府の満珠干珠を逆に見る位置に来て沢山の船と共に投錨した。此処に一夜を明かすのである。如何なる事情のありしか知らねど、一度岸壁近く迄入港したものを今一度港外に出て一泊して又明朝入港せよとは、実に決戦下の時勢をワキマ

エぬ仕打ちである。一頓の石炭も無駄に使はしてはならん時である。然るに如何なる規制違犯があったにせよ已に入港して居る以上其まゝに仮泊させるべきである。然るにワザワザ港外に往復させるとは何事ぞやである。

如此事が到る処に在る。これを責めんか規則違犯である、致し方なしと云ふのである。此規則違犯と云ふ事が抑々の考へ違ひである。然り、規則違犯ではあるが已に此処迄入港して来て居る以上又止むを得ない、以後は再びは許し難し、今日は特に仮泊せよとなつて此に始めて決戦下の処置として成程と肯定出来るのであるが、已に入港せる事実があるに拘らず仮へ違犯があつても此の入港して居る事実を変更させるとは怪しからん事である。此れを仮へば日支事変は始めの出発点に仮へドレ丈の誤算があつたとしても已に一度日支事変と云ふ戦争になつた以上出発点の誤りや誤算を云々しても致し方なし、已に戦ふて居ると云ふ事実が實力を以つて推進するものである事は云ふ迄もない事である。現在は此立論が認められねばならん時であるのに、此立論を無視して仮へ戦争して居つて出発点に誤りがある以上戦を止めて出発点に戻れと云ふても、それはナカナカ出来ない事である。なぜなら已に敵を造つた事実は此方の勝手のよい様にばかりは出来ない事である。それであるのに、本船の場合の如き日本人と日本船との間の事であるからとて戦ひの事実と均しき入港して居ると云ふ事実を無視して規制違犯であるからとて再び港外に出して明朝再入港せよとは、断然許す可からざる役人の処置である。又一方船長にしても時局をワキマエぬ処置である。仮へ役人がなんと云ふても、一籠の石炭も今日は無駄使ひは出来ぬのが国策〔で〕ある。如何に規則違犯であつて〔も〕違犯の処罰は別に甘受する。仮へ違犯にもせよ已に入港せる以上断じて出港せずと頑張れで〔ば〕それ迄であるのに、其主張をせずしてオメオメと再び出港すると云ふが如きは、此れ又決戦時局を無視したものであると思ふ。如此人によって増産とか増進とか云ふ様な事が果して出来るであらうか。私は遂にアーの一声を發するのみである。(二六〇四、七、五、夜半)

七月六日

午前二時四十分頃遠く大砲の音数声を聞く。吉か凶か気にかゝることである。然しドウヤラ実弾演習らしかった。午前六時門司へ再入港して、九時にヤット上陸が出来て正午に出帆した。夜十時来島水道を過ぎて寝た。同船の鷲尾華興商業頭取、織田日本銀行員、菅沼三井物産員等と又一夜を共にして、依然として下痢続く。

七月七日

午前九時目的の神戸港に到着した。直ちに薩摩屋旅館に入って休む。森尾君を住友火災に訪ふて昼食とお茶の御馳走になつて其上弁当迄失敬して、午后二時半の汽車で西下、午後七時三十五分笠岡着池田に寄つて御馳走になつて、九時前闖場から乗車して午後九時四十分井原着、和平さんが出迎へて呉れたので十時過ぎ奥井へ着く。皆無事。

七月八日

朝早く起きて隆をつれて河原へ出て運動して帰つて朝飯にする。甚だ甘し。今日佐世保、八幡へ再び拾数機の米機が空襲したとの事だ。夜半に此の田舎迄警戒管制が行はれた。

七月九日

今日は井原の一新で井原、芳井の名士と笠岡の名士を集めて漫談一席した。井上で夕食をして帰る。

七月十日

小包を牧野、伊藤、福永、井上、田口、文求堂、岩波、内山、賀川、村田、小原、山口慎一等へ出す。午前十時から井原女学校の全校生徒に（四、五年勤労報国の為メ不在、三、二、一年生のみ）漫談した。中条から児島さんが来た。夜は佐原、與井の人に「まこと」で漫談した。下痢は依然として続いて居る。慢性となった様だ。

七月十一日

今日は正午から江原の大山君の宅へ行く。夕方から又一新で後月商業組合の人々に又漫談することになって居る。大山恒君の宅は西江原町の谷合ひにある実に閑静な住居である。其中で彼れは沢山の書物を貯へて頻りに勉強して居る様である。そして彼れは俳句に精進して居る。笠原節二と岡田順一との二人の級友が来て時を忘れて話し合ふた。かしわと粽が出て昔なつかしい姿を見た。后で御馳走が出て時の過ぎるのも忘れて昔噺をした。午後五時頃に迎ひの車が来て呉れたので別れを惜しみつゝ、一新へ帰った。已に商業組合の人々が集って居られたので又話をした。今度は迎ひの車が后れたのでトウトウ拾時過ぎて帰って来た。

七月十二日

今日は午前九時から国民学校で話す事になって居る。下らん話をして終った。今日隆を小田川で特訓した。此れで河へ這入る事を覚へた。

七月十三日

午前四時頃から腹痛が起ってトウトウエライ下痢をやったので終日寝て暮らしたが、それでも隆を裏の河へ連れて行ってやった。今日はトウトウ肩迄の処で立たした。

七月十四日

決心

大陸に文化を守る、此れが私の最後の働らき場所である。此れが方法として日本の紙型に因る印刷物を上海で造って売れるなら売るが、三百冊位以上を蘇州の図書館に貯蔵する事。戦後の世界に日本文化を大陸に存する事は未だ考へられて居らん事である。

蘇州の図書館は先づ内山個人の書物と店員全部のものを買い取って、又他の人々からも買い取って小規模の図書館を開らき、内山夫婦は蘇州図書館に住む事。此事に対して岩波氏と協議する事。上海の資金と共に岩波氏の投資を此方面に十二分に活用する事。

以上が決心の骨子である。私の決心を此に導いたものは亡き母の霊の導きである。

今日も隆は河へ這入った。ナカナカ面白いらしく藁草履をはいて喜んで居る。表の道路が少し危ないのが気になるが神の守り豊かたらん事を祈って居るのみ。東京から上海からの急電で至急東上せよとの通知あり、明日下痢を押して行く事に決心した。

七月十五日

東京からの電報で出発する。笠岡で池田の厄介になって、十二時四十五分発午後七時半京都着で、九時に小倉の家へ落ついた。此処へも東京から電報が来て居った。下痢は依然として居る。

車中の歎

昔の乗客には脂ぎった布袋腹が随分居ったものだが、今日の乗客は悉く羅漢タイプで一人の布袋なし。車中で五つ位イの女の子が何かお呉れ腹がスイた腹がスイたと云ふて居るのが可哀想で、トウトウ

餅を壹個やったらダマツテむしゃむしゃと餅を食べて居った。且つて飴や菓子の味を知って居る子供は可哀想である。何んにも知らん子供は何ともないが、吾々が且つての文化時代を知って居る丈けに苦しむのと同様に、子供等も子供らしい苦しみがある。

七月十六日

朝伊藤、牧野、福永さんを訪ふ。牧野先生在宅、伊藤先生丹波行き、福永さん教会行きで不在、駅の手提げを受取って帰る。下痢腹でナカナカ重かった。東京へも上海へも明日上京する旨電報して帰ったら、東京から二通電報が又来て居った。

偶感

齒磨粉に今日尚ほ粉、半煉、煉などの三種もあるのは何故であるか。コウした事を統制する事が実際の無駄をはぶく事ではないか。粉の袋入り一種でよい筈である。同一商品の容器の種々や製法の変化(齒磨の如き)などを禁止する事は目下の決戦下に於ける最大の急務である。メンソレータムなどでも容器をタゞ一種にする事、定価を一種にする事は如何に人力と物資の儉約になるか最も考へねばならん事である。売薬などでも今尚ほ五十銭、一円、二円、三円、五円と云ふ風に色々があるが、一種にすべきである。商品の単一化は或は此の種類の単一化の方がより有効ではなかつたかと思ふ。仮へば胃活、胃散、アイフ等が統合されて一種の存続となるよりも、此等の各種を許して一円とか五十銭とかの定価を単一化した方がより簡単にしてより有効ではなかつたかと思ふ。今日の様な統合の行方は矢張り実情に則して居らなんだ様である。

七月十七日

今日拾時五十分京都發で上京する事に手続きをした。○〔丸〕物で紙型の書類入れ、紙のエプロン、紙のチョッキ等を買った。コンナ品が平素に出来て居るなら支那人も感心する程度が違ふのだが、今日出来たのはいよいよ窮余の一策としか見ないであらう。残念な事だ。

車中一看

ドノ面を見ても一寸小股すくひと云ふ面付である。此れが二等車の第一印象である。而も此の印象は遂に日本人の最大多数者に最も適當せるものである事と思ふ。時に民族としても亦た小股すくひより出ないものであるかと嗟嘆せざるを得ないものがある。

○日本には色々の代用品が出来て居る。それが平素に出来て居るのなら文句はないが、今日に出来たのであるからさもしい次第である。代用品でも靴がはき度いのか、代用品でも洋食が食ひ度いのか、代用品でも洋館に住み度いのかである。

○両切たばこの吸ひ方が近頃全く上海式に其まゝ喰〔は〕へる様になった。そして捨てる部分が大變多くなつた。然し日本には香煙ビイク〔ピック〕の商買〔売〕はない。それだけ不徹底の生活であるのだ。

○今年は旱災らしいと云ふので、七月中旬未だ植付の済まない田地が多くある。モウ代作をと云ふ向きもあるのだが、其筋では七月中は代作を許さずとか云ふて居るとの事であるが、許すとか許さんとかの事よりも、代作せんにも蕎麦にしても粟にしても高粱にしても第一其種子がないらしい。すると支那人は此の点でも確実性がある。日本もこれにこりて、今後は毎年農事試験場あたりでチャンとイザ鎌倉の為メの代作の種子を貯蔵する事を忘れてはならんと思ふ。個人個人は天災地変を考へて代作用種子の栽培をして居ったのが、近頃は何んでも新式になって恰も天災地変は已に克復〔服〕し終へたるが如き考へになって居る。此れが科学の過信、現実への盲目と云ふ事であるのだ。戒めざる不可忘る可からずである。

○増産と云ふ事が頻りに云はれて居るのに、増産の土台である田地が工場や駅の拡張などでドンドンつ

ぶされて居る。此れ等は無論必要の為メではあらうが一寸逆行の様な気がする。

○両切香煙のパイプなしの吸ひ方は極めて小さい事ではあるが、逆に吾々日本人は他人から習ふと云ふ事よりない。又その習ふた事を流行させると云ふ一種の技術を持って居る外、独創性が甚だ欠けて居る事と思ふと共に、逆に吾々は指導の心配がなく被指導者に甘んじるより外ないと云ふ事が考へられる。

○僥倖を頼むと云ふ事は甚だ危険である。物の量で押して居るのが米国である。物量如何に膨大なりと雖も、人心が其和を欠ぎ戦争に対する自信を失ふたら遂に勝敗はダメであると云ふ事は、屢々云はれて居る事であるが、近頃其物量の為めに国民をして僥倖心を助長せしめて居る例がある。新種特別預金がそれである。貯金にトミ籤がついて居るのである。此れは一つの矛盾であるが、他にも此れと同様の矛盾がありはせんか私の憂慮するもの、一つである。

○列車中弁当の配給が行はれて居る。静岡で受取るので全国鉄道旅客食糧統制組合がやって居る。金五十銭也である。午後四時半車中で引替券を配布する。飯はジャガ芋が大部分で米麦高粱のベタベタ飯であった。お菜は昆布の塩煮にジャガ芋一と切れ南瓜一切れ鰯の尻尾二つ（約一寸位イ）何か魚の骨を粉にして寄せ物にしたのが一切れ楓葉形の生麩一切れと福神漬少々が、静岡幕の内弁当の現状である。此時一寸妙な物を見た。

○多分小倉経済顧問と思ふが名古屋から二人の従者を連れて乗車して居る。静岡駅で何か布巾のかゝった特弁を駅員が持ち込んで来た。中味が同じであればよいが、万一にも特別の物であったら此が実に怪しからん事である。最早大臣が特別扱ひを受けるべき時代ではないのだ？

午後九時無事東京駅着、嘉吉さん、松藻さん、暁、鶉、みえ子の総出迎へを受けて青年会の宿舎に入った。イヤハヤ青年会らしい部屋部屋である。持って来たおにぎり三個を子供に一つづ、御馳走して、代用食の自家製フカシパンを貰ふて食べた。

◎上海からの電報は、一つは上海の日配会社が新会社から売上総額の三分を取らうと云ふとの事である。家賃として金三千円位イなら支拂ふ事は可能であるが、売上高の三分は支拂へないと云ふのである。売上高の何分と云ふ事は利権的行為である。家賃は場合によっては苦しからず、

「シンカイシヤハ イカナルリケンモミトメルベカラズ」, 「シンカイシヤセイリツマデニ 三ツウフサンカナラ ハイゲウシテモラウコト」, 「チウビコウシハ ガイコクシヨーサイノシンカイシヤユヅリワタシヨヤメテ コレマデドウリニスルコト」, 「イヅレモ ロウバンユウカイノイケンヲキカレタシ」  
七月十八日返電

七月十八日

上海から又電報だ。

コ〔ウ〕 ショウラムリスナ エンキモヤムヲエヌ ウチヤマシヨテンナイニシンカイシヤノジムシヨヲオクコトハコマル ロ〔ウ〕 バンユウカイノイケンヲキカレタシ

と返電した。岩波書店を訪問堤支配人と栗田賢三氏とに面会した。岩波氏は信州にて静養中との事、近日小生が信州を訪問する事になると思ふ。午後大橋氏を訪問暫らく話したが、時を選んで懇談する事にした。

華鉄の秋田氏と会ったので高橋氏を紹介して貰ふた。夕食を紫金荘で頂いた。待合の看板が皆んな国策会社あたりの東京別荘？になって居るのは、流石に小股すくひの本領が見へて居る。

◎サイパン島の全滅が発表された そして海軍大臣が交替になり参謀総長が解任された。而も怪やしくも東條内閣の総辞職が伝へられる〔に〕至った。イヤ実際総辞職したのである。

◎私の不思議に堪へないのは、ガダルカナルにせよサイパン島にせよ相当永い日数の間孤軍敢闘して居る様であるが、其間に日本の武力は援兵を送り救援することが出来ないのであらうか。此れが私には解らない点である。

七月十九日

朝早く小原くんが来た。トマトや焼飯を持って来て呉れて共に食した。神田の店へ行った処へ村田君がやって来た。それから小原の家へ行く事になって共に渋谷迄行く。村田は帰宅する。私は小原と共に六角橋へ行く。日本橋をソカイしてゴタゴタして居る中ではあったが色々御馳走になったり耕作地を見たりして共に語った。不遇の子もすこやかに育って居る。今夜は一泊した。

七月廿日

はからずもお千代さんの兄さんがバリカンを持って来て子供等の頭を刈りて呉れた。ついでに私も刈りて貰ふた。東京へ帰って来たら上海から電報が来て居るが、今日は本屋の定休日であったので先づ親籍〔戚〕巡りと田中、荻田、猪木と田口さんを訪問して、雨が降りかけたので夕食をして、嘉吉さんが送って呉れて宿へ帰った。旱天だ早災だと云ふて居った処へ今日の雨は甘露であった。農家の人達が如何に喜んで居るか想像の外である。それにしても人間の無力さよ、一粒の雨も降らす事は出来なかった。

七月廿一日

○岩波書店で小林さんに会った。親父は堤さんの話でも早く早くと云ふて居るが、支配人や外の人々はナカナカ大事を踏んでスグに実行には移らない様である。つまり小林さんが一度実況を見てからになると思ふ。それでよいのだ。

○九段営業所を見た。皆なつかれて居る。鍛冶さんが主任である。喜多さんが営業部長であるが、二人共長の字が嬉しい位イの小僧上りである。

○横山大佐を訪問して面会した。

○改造社を訪問したが山本氏不在。

○鳥越訪問、子供四人百日咳で困って居る。

七月廿二日 土

午後五時から太田君の宅へ出かけて、葉、陳、姜さん達と話して夕食を共にして、村田へ来て泊った。村田のマ、は胃カイヨウらしいとの事であるがモウ大丈夫らしい。和子はナカナカよく働らいて居るが帝国水産会社へ出勤して居る。

七月廿三日

経堂教会の日曜学校で一つお話をして、聖書学校でも一つお話をした。礼拝の后で御挨拶替りに一寸漫談した。そして宿で寝た。今度は神田の店で食事の世話になる事甚だしい。

偶感

内地人の神経は非常にトゲトゲしくなっている。コレは其最大原因が何処にあるかと云ふ事は、云ふ迄もなく〇〇（ママ）が面白からぬ様相を呈して居る事と生活が全面的に満腹感が得られないいらいらした気持ちからである。

七月廿四日

岩波書店訪問、堤支配人土曜日から信州行き、小林氏未だ来店なし。駿河台営業所へ商売に行く。西村君を煩はして色々注文を出した。ポアンゴッホ四百送る。ドラクロア式百注文した。其他の品も又注文に行く事にした。本社で大橋専務、田中東亜課長と面会した。新会社の件は内山と大橋とに任せる様にしては如何と上海へ電報した。坂田と柏木との入れ替へが必要と思はれる。フロント、東光の件も相談

に乗った。フロントは五円定価にして送るらしい。東光は一円五十銭位イかと思ふ。文求堂を訪問して神田の店で増田君に会った。長野朗君は興亜本部に居る由、小口、波多野、増田が大東亜省の総務局総務課に頑張っている。

七月廿五日

岩波書店で堤さんと正午迄おしゃべりして正午第一ホテルに行く。土屋氏の午餐会であった。水田支配人と高木陸郎氏と四人で食を共にして午後三時迄話して分かれた。帰途一寸朝日新聞社に寄って原田に会った。大変元気そうである。会議があるので橋本君と話して呉れ何れ日を代へると云ふ事で分れたが、橋本君から何か上海の朗らかな面を一寸でよいかから書いて呉れんかこれは誰れにでもは書けない事だからと頼まれた。神田へ帰って一泊した。

七月廿六日

朝宿へ帰って見ると田口さんから手紙が来て居る。岩波さんから電話があった様だ。高橋さんからも電話があった様だ。豊島興志雄氏からと日本文学報国会からと電話があった。今日午後三時に中国新文学会の会合があるから是非出て呉れとの事であったが、今日は日配で午後三時からの約束があるのでお断りを増田氏に頼んで置いた。岩波の小林君から電話があってスグ来いとの事で行ったが、岩波氏とはかけ違って会へなかったが小林氏と話して上海へ同道を約束した。高橋（華鉄）へ電話したら来て呉れ東亜交通公社へ同道するからとの事で雨の中を出かけた。同道で丸の内の交通公社へ行く。初め文協に居った清水君が居ったので一寸ビックリしたが、其為めに切符をお頼みする事に好都合であった。又雨の中を帰って来た。神田で昼食して午後三時の日配へ出かけた。丁度上海図書有限公司から一切を白紙にして大橋と内山とにまかすと云ふ事が来て居った。大橋氏の考へでは上海の事は一切を内山氏にまかすべしと云ふ考へらしい。私の責任が重くなるばかりであるがいよいよとなれば又止むを得ぬ事である。三時から各課長や所長を集めて五時迄話して、大橋、尼子、田中氏と共に夕食に行く。午後八時帰宿、水浴して今日は終りである。

七月廿七日

午前中田口さんへ行ってお祝ひに下さった服地を頂いて来た。午後は改造社に山本氏を訪問した。又日配に大橋を訪ねて上海の件を話したが、一度白紙にして大橋と内山に委かすと云ふ事になったのに、坂田氏から精算管理委員に任命されたとか建物の使用は猶予して呉れとか云ふ電報が来て居ったので又如何なる理由かと申合せ電報を打って貰ふた。再会を約して返電を待つことにした。山本氏から電話があったので又山本氏の宅へ出かけて白米のカレーや色々豪華版の御馳走になった。そして目黒清水町の別宅へ行って、星野婦と村井時子とを相手に一時迄話して一泊した。

七月廿八日

今朝宿へ帰って見たら柴田から電話があったり色々要件があった。正午少し前にやっと岩波氏を捕へて小石川の邸へ小林君と三人で出かけて御馳走になった。朝日新聞社から一日の午後原田が御馳走するとの事で和田、川崎から電話があった。切符が未定なので華中鉄道へ行く。高橋氏不在、旅行証明書と身分証明書を預けて帰る。山本婦から土屋文明先生へ金五百四十円也、丸林氏へ四百円也、正路君へ百円也渡して呉れと依頼を受けた。岩波書店小林氏はいよいよ小生と同道で上海へ行く事になった。日配から連絡なし。

七月廿九日の思出し要件

○秋田氏から依頼の小宮先生へ交渉の件

○正午頃岩波書店から只今主人が来ましたからと云ふしらせで早速訪問したら、小石川の宅へ昼食に行こうとの事で同道した。岩波さんと小林君と私とで涼しい座敷で御馳走を食った。いよいよ小林氏の上海行きは決定した。行動は別々になるか同一行動を取るか未定だが兎に角上海で会ふ事にした。

◎日配会社で大橋、田中、尼子氏と会合して上海図書会社の大綱を極〔決〕めた。上海図書会社と日本出版配給会社とは合体する事を骨子とする

と云ふ大綱が此に出来た。細目については田中氏同道内山帰滬の上決定すること。駿河台へ寄って村田へ行く。新宿で小田急故障あり京王線で迂回して行く。丁度夕食が始まる処であった。四人で御馳走になった。一泊。

七月三十日

朝の礼拝に出る。三十数名の来会あり、「日支相互の理解と反省」と云ふ題で話した。夕食に村田と二人で河井先生で御馳走になって又一泊した。小原秀次郎君が来て居ってゆっくりと話して帰った。

七月卅一日

朝麴町の河辺さんを訪問して暫らく話して、神田へ来て中央公論社を訪問して松下、前島、湯川君と暫らく話した。同社は本日より先づ解散式をしたとのこと、残務は湯川君が主任となってやる由。紙型の事を話して二日に再会する事にした。

○日配会社で坂田氏からの電報を見る。田中氏いよいよ出張する事に決定。

八月一日

日配へ行く

大橋内山協定

日配と上図書とは合体を基本とす。日配は上海地区（将来は中支地区となる事を予期して）に於いて実力ある血の通ふて居る枝を生きたのである。上図書は同一意味に於いて血の通ふて居る親木を得たのである。日配と上図書とは各自便宜の名を使ふてお互ひに日本文化の大陸発展に勤むること、実に於いて又然り。

具体的の解釈

日配が現在ケリーの土地建物の払ひ下げを受けんとしつゝあるが、上図書に其店舗を使用せしめる事によって払下げ優先権を失ふとすれば、それは管理目的を放棄せるに因ると。云ふなれば上図書は同時に其管理目的を継承するが故に優先権を得ることになる。然れば上図書は日配に代って此れが払下げに努力し、已に払下げを受けた後更らに其まゝ日配へ譲り渡せば可ならん。

○人事に於いて若し日配にて必要とあれば内山をして日配出張所長を依頼するならば、喜んで其責に任ずるであらう。

と云ふ様な事を書いて尼子氏に見せた処誠に結構と云ふ事で、いよいよ此意味の写真電報を大橋内山の名で打電する事に決定した。改造社の紙型の件を交渉した。中央公論と同一条件に於いて此れに準じるとの事明日更らに会見する。

午後五時半から三崎町北平と云ふ支那料理店で朝日新聞社の原田の招宴あり、橋本、川崎、和田と自分と七時迄歓談した。原田に麻姑祖廟仙壇記上下を記念に贈る。

八月二日

- (四日) 四ヒ アスー八ジ五〇フンケフト〔京都〕ツク 一バクタノム (井上平三郎)  
(四日) 四ヒ 九ジ二四フンケフトカラキチ〔貴地〕ツク ゴージタツヨウケンタノム (近江兄弟社  
諸川)  
(四日) 四ヒ 一七ジ四〇フンウメダ 一バクタノム (森尾さん)  
ミタ ゲツマツタツヨテイ (小原, 小倉市赤坂二七〇マネキ旅館)  
(五日) 五ヒ 一六ジカサオカツクヨテイ (芳井, 内山)

八月三日

朝華中鉄道の高橋調査役及星野婦, 山本婦, 東京店の一家に見送られて午前九時発で出発した。昨日夕食は東亜交通公社の小西, 清水氏に招かれて日配東亜課の齋藤氏の案内で神田のおきくさんと云ふ小料理屋でタラ腹の御馳走になった。午後六時五十分京ト着直ちに小倉へ行って泊まった。

八月四日

朝八時二十二分京ト発の上りで八幡に行く。希夫君が出迎へて呉れて吉田氏宅を訪問, 一寸話して更らに長命寺の成練場に行く。諸川, 田口其他の人々と会合して約一時間半色々上海の模様を話し, 近日安田君が出発せれる事を聞いて直ちに出發, 一時一分八幡発で西下塚の大浜三浦宅で一泊, 此夜一寸食中りをして大浜にヘドを吐く。翌朝梅田駅へ行く事に交通公社谷川支社長の極めて冷淡なる御挨拶を頂いて決めた。

八月五日

梅田駅の関釜聯絡船申込みに行く。長蛇の陣は遂に空しく立往生に終る。一先づ小倉に行って又堺へ引き返へして, 福助足袋の社長辻川豊三郎氏と川盛代議士とに上海話をした。又一泊して。

八月六日

朝出發, 拾時三十五分梅田発で出發。午後四時半笠岡着, 直ちに井笠〔鉄道〕に乗って芳井へ着。ヤレヤレと一服して居ると東京から切符がダメと云ふ電報が来る。

八月七日

今日も一日川遊びをしたが, 夜になっての雨は一寸喜ばせた。

八月八日

今日も一日降りみ降らずみの空が, 夜になっていよいよ本格的な雨となった。東京から電報で九日岡山へ行くと云ふ。八月九日岡山で十五日〔の〕切符を売るとの事である。

八月九日

大雨を犯かして岡山行きをやる。朝四時から起きて先づ厚生車が失敗になって, 六時過から雨の中を歩いて井原駅へ行く。汽車が一時間后れで笠岡へ着いた。更らに本線が四時間后れ三本取消し五本目が八十分后れでヤット十一時四十分に出發した。流石に大雨中とて岡山駅は閑散であったので切符の申込みは好都合であった。十二日に来て呉れとの事で直ちに引き返へした。車中藤井円士郎氏と偶見した。大水が出て大喜び。

八月十日

中条〔に〕行き午後二時から国民学校で約三十人ばかりの人々に話して一泊、夜中空襲警報鳴り渡り一寸驚かされた。「上海空襲さる」

八月十一日

朝リヤカーに乗って湯野村に出で井笠鉄道で帰った。井原から西瓜を提げて（児島のお土産）おすしもあった。與井迄歩いて帰った。スグ川へ隆とはいって汗を流した。井原から写真屋さんが来て呉れたので四枚写した。東京から千円の電為替が来た。上海から北廻りで帰れと電報が来た。

八月十二日

朝岡山行き。

確信

確信の無いことは完成が期せられないと云ふことをよく云ふが、若しもそれが真であるならば私は考へざるを得ない。抑々確信は如何にして得られるものであるかと云ふことから考へて見るのに、如何なる確信も実験を経てゝなければ出来るものではない。一つの化学試験などでも実験と称する雛型を経て始めて確信が出来るものである。更らに試験ならざる実際に無試験によって得たる事を行ふてそれが目的通りに出来たとすると、其処に始めて動かない確信が生じるものであることは云ふ迄もないことである。

今日の国内状勢を考へて見るのに、日支事変后已に七年を経て居るにも不拘未だに会議会議で何事も会議ばかりやって居る。そして会議の決議など云ふものは一向確信のない事ばかりである。此れで目的が貫徹出来るであらうか、私には不安がある。如何に標語で立派な事を云ふても実行が伴はなければ零である。確信なく思ひつきで色々の事をやって見ても実に其場のがれの事のみである。私の不安は今日の日本を動かして居る中心である官吏役人が余りにも確信を持って居らん点にあるのである。十五日の切符が手に入ったので早く帰ったが、吉田の小堀を訪問した。

十三日

終日芳井で隆相手に川で□□す。いよいよ明日は出発だ。妹尾鶴二、瀧本哲太郎に会ふた。インパールはいよいよ新陣地へ整理された由新聞に見た。米機しきりに小笠原島を覗ふ由誠に痛心すべきことである。

八月十四日

今日は芳井に左様ならする日である。朝隆を連れて川原に散歩して帰って朝食をする。

旱天に拾ふ

今年は雨が少くて農家は大変に困った。時はまさに増産必須であるに、天帝何を考へてか雨を下さること数十日、稲の植付けが出来ないとか折角植付けたものが枯死するとか云ふ始末で憂色歴々であった。此時に思ふたことは、何程雨の降る原理を握って居っても何程天文に明るくても実際に雨は降らないのである。雨が降らねば川や池の水は枯れる。従って稲も芋も枯れるより外ない。八月八日夜沛然として雨降り来る。九日も続いて降る。人々喜色あり。始めて農作物が救はれたのである。此の雨人力の如何とも為す能はざるもの。仮へ奈翁の辞書に不可能と云ふ文字なくとも、雨を降らせることは奈翁にも不可能である。タゞ人間の思ひ上りがよまひ言を云はせただけである。旱天も雨天もタゞ神の手の中にあるのである。人の力では如何共出来ないものである。其処に人力の限定があるのだ。人も亦た雨や旱と共に神の手に生かされ又死ぬるものであるのだ。

八月十五日

朝七時に汽車は下関についた。長い廊下を重い荷を提げて船に乗った。丁度田中氏も乗って居られて都合よく同行する事になった。午後七時釜山に入港したのでスグシャンハイと芳井とへ電報して、二十時三十分発で京城に向った。船は昨年は一室二人であったが今年は四人詰めになって居る。ター一人分の場所に二つのベッドを並べて其上に横に三人が寝る様にした丈けである。

八月十六日

朝八時半に汽車は京城についた。日配支店へ行って見て驚いた事は、如何に日配は商人にあらずとは云へ余りにも営業と云ふ事を無視した偏避な処に事務所を持って居る事が〔で〕、支店長は且つて上海華中印書局の社長格であった鈴木格三郎とか云ふ人で、先方は御存じの様だが私らは記憶がない。清香園で昼食の御馳走になって山本旅館に泊る。三越でお土産の大島を一反買った。宿にゆっくりと一日を寝た。

八月十七日

京城の朝はモウ秋らしい色々の虫の音が私の耳を涼しくして呉れる。目と鼻の間に小高い森が陰鬱其〔の〕もの、様に黒く見へて、中から油蟬の声が細く長くミーンミンミーンミンミーンミーンと頻りに聴へる。森の上に十字架の尖塔が天国を指して、灰色の雲が悠々と空一面を覆はんとして居る。ホンのチョッピリと明るい雲間に糸の様な二日の月が凄い光りを下界に投げて居る。突然空にピーロピーロピーロと鶯が啼いて、近処の家の鶏がコケコッコと時を告げた。私は独り露台に立って飽かず眺め又聴いて居る。何んと云ふスバラシイ京城の朝の一時だ。午前八時に発車して北上した。

汽車

走る走る朝鮮の中央を南から北へ二昼夜、煤球児の煙を上げて汽車は走る。遠く近かく松の緑の山の浪、広く狭く早稲や晩稲の水田が、高く低く高粱や粟の太い穂波が。穴居から程遠からぬ藁葺きの平房から大きな身体が出入する。丸でパノラマの様だ、夏の朝鮮は。

夜八時半安東着と云ふ少し前に、税官吏と云ふ者が荷物の検査をした。其言葉が甚だ奇怪であるのみならず、已に日満関税撤廃された今日尚ほ如此は実に噴飯物である。

#### コメント・感想いくつか

上に掲載した完造さんの雑記には、1944年6月5日から18日までは上海におり、18日から船で満洲に向い、青島經由大連、奉天、新京に滞在し、7月2日に大連を離れて、7日に神戸港着、その後故郷井原に寄ってから京都、東京に移動し、再び井原に滞在した後、8月15日に下関から釜山、京城を經由して17日に安東に着くまでに出会った人物のこと、処理した仕事のこと、さらには、日頃考えていることについても、忙しく各地を駆け回りつつこれほど様々な内容で書けるものかと感じるほどに書き込まれている。しかし、ここではいくつかの事を取り上げるにとどめる。

上海で書いた文は、日中戦争（1944年のことゆえ、完造さんは「大東亜戦争」と表現）で日本が次第に追い詰められつつある状況を多くの事例をあげて伝えている。インフレで物価がどんどん高騰し、日本人経営の店がだんだん閉鎖されている状況、戦況については、米英軍が欧州大陸に上陸し、ドイツ軍がローマを撤退し、日本軍がアッツ島でもガダルカナル島でも「悲壮なる玉砕」をしたことに触れ、上海で初めて空襲警報が鳴るような事態になったとする。そして、そうした状況に関連した一文、6月10日付の「有ったものが無くなったのだ」は、それまでは中国内を旅行する日本人が多かったのに最近トンと少なくなったと知り合いの中国人に指摘されて、それに気づいていなかった完造さんは「ぎょっとした」と書いているのは印象に残った。

次に2週間滞在した満洲では、大連でも奉天でも新京でも現地の日本人が経営する出版社や書店を訪ねて本を購入したり情報交換しているが、この辺のことを『花甲録』には奉天でも新京でも同業者に面会して「色々時局談などしたが、どうもピントが合わな」かったとする。また、3地いずれでも漫談をしたとする。完造さんは「漫談」と書くが、上海で書店を経営しながら知り合いや客から仕入れたネタや長年各地で体験したことなどをその時々状況に合わせて気ままに語ることを講演とは言わず漫談と名付けたものようであり、満洲に行く以前からその後まで用いる呼び方である。

ところで、満洲滞在中に完造さんが書いた文でとくに印象深いのは、6月29日に書いた「暴風雨」「満洲再感」「満洲満見」である。彼は「北支も中支も場合によっては放棄してもいいと思ふ。イヤいさぎよく北中南支を放棄して満洲を守れと云ひ度い。満洲さへ守れば日本の人口問題は解決できるのだ」と書き、「曠野に働らく山東人は大地からはへてる。辛辛苦苦……あれこそ吾等自らやらねばならん事であるのだ……足が大地にメリ込んで動けなくなった時、それこそ吾等が望む最後の満洲である」と書く完造さんは、この期に及んで満洲だけは日本人が地に足をつけて守るべきだと考えているのである。

日本に戻ってからは、まず故郷で土地の名士を相手に、さらに女学校や国民学校の生徒を相手に漫談しているが、その頃7月14日に書いた「決心」は、これから上海に戻った後に取り組もうと考えた内容のようである。「大陸に文化を守る、此れが私の最後の働らき場所である。日本の紙型による印刷物を上海で造って売れるなら売るが、三百冊位以上を蘇州の図書館に貯蔵する事。……蘇州の図書館は先づ内山個人の書物と店員全部のものを買い取って、又他の人からも買い取って小規模の図書館を開き、内山夫婦は蘇州図書館に住む事。此事に対して岩波氏と協議する事。上海の資金と共に岩波氏の投資を此方面に十二分に活用する事。」

そして、上京するとこの決心に沿って行動しているようであり、すでに解散させられている中央公論社や改造社で出版された本の紙型を買い取り、それを利用して上海で再出版する話をしており、また、岩波書店の責任者と繰り返し連絡している様子が書かれていて、そこで岩波側と話しているのは昭和20年になってからの雑記によれば、内山書店の仲立ちで岩波書店と聯合出版会社が共同出資して上海で出版事業を行うことの相談だったようで、その話は岩波も解散させられることで実現に至らなかったという。東京では、上海図書有限公司と日本出版配給会社を合体して、完造さんがその責任者になるという話もされているが、こうした上海での出版業界統合の動きの詳細は大里には不明な点が多く、今後の課題となる。

満洲から日本とふた月近く駆け回った旅は8月中旬に終わり、朝鮮、満洲経由で9月になってから上海に戻ることになる。